



# けやき会通信



## 「患者さんとともに」

関東中央病院 臨床検査科 本多美奈子



皆さんもまだ記憶に残っていると思いますが、本年7月に広島県を襲った西日本豪雨災害、9月の北海道胆振東部地震、関西国際空港に大変な被害をもたらした台風21号、そして、台風24号、25号と今年は災害が多い年でした。そんな暗いニュースの中で舞いこんできたのが、がん免疫治療に関する発見をした功績により京都大学特別教授本庶佑氏が今年のノーベル生理・医学賞を受賞したことです。大変嬉しいことで、日本の医学はこれからも進歩、向上して行くのではないかと思います。

私が、初めて糖尿病に関わったのは、代謝内分泌内科部長水野先生の前任でいらした元代謝科部長林正紀先生のもと、放射線科で「インシュリン」を測定したことにさかのぼります。暫くして糖尿病教育入院が始まり、入院された患者さんの病態の状況、経過、改善策を週1回医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、臨床検査技師が意見を出し合い、熱い討論を行っていました。私も参加させていただき、覚えた知識や技術を伝えることで精一杯でした。

糖尿病患者の会「櫻会」に参加させていただき、糖尿病療養指導士として、臨床検査技師として大変勉強になりました。検査について説明が終わり、最後に疑問点について何うと、中高年の男性から「尿糖プラス(+)とはどういう意味なのですか。あなたは、検査技師だから理解できるかもしれないけど僕には意味がわからない。」と質問されました。その一言で私は、「尿糖プラス(+)」の意味を患者さんは理解しているものと思込んでいた自分に気がつかされました。それ以来、臨床検査技師としての立場からではなく、患者さんの立場に立って説明することを心がけてまいりました。そのことがなければ患者さんのことを考えずに検査内容や検査値の見方、合併症など臨床検査技師の目線で説明しつつづけていたと思います。患者さんから教えられたことを教科書として、育てていただきました。

糖尿病の患者さんとかかわり数十年、新しい薬が開発され、インシュリンの注射器もペン型に変わり、血糖自己測定器など糖尿病の患者さんを取り巻く検査、治療が大変進歩してきました。2025年、日本は団塊の世代が75歳の後期高齢者となり、国民の



3人に1人が65歳以上、5人に1人が75歳以上となり高齢化がピークを迎えます。糖尿病の患者さんにもより一層の高齢化の波がきます。生活習慣、体調などさまざまな変容があり戸惑うこともあるかもしれません。これからも、患者さまに寄り添い、知識の向上を忘れずに患者さんとともに糖尿病に向き合い、支えてゆきたいと思います。

